

クロニクル、クロニクル！

CHRONICLE, CHRONICLE!

January 25, 2016 to February 19, 2017

荒木悠 Yu Araki
伊東孝志 Toshio Ito
大森達郎 Tatsuro Omori
荻原一青 Issei Ogawa
川村元紀 Motonori Kawamura
清水九兵衛 Kyubee Kiyomizu
斎藤義重 Yoshishige Saito
笹岡敬 Takashi Sasaoka
清水凱子 Yoshibko Shimizu
ジャン=ピエール・ダルナ Jean-Pierre Darnat
鈴木崇 Takashi Suzuki
遠藤薰 Kaori Endo
田代睦三 Mutsumi Tashiro
谷中佑輔 Yusuke Taninaka
牧田愛 Ai Makita
三島喜美代 Kimiko Mishima
持塚三樹 Miki Mochizuka
吉原治良 Jiro Yoshihara
リュミエール兄弟 The Lumière brothers

だって、人は生きた印を残すことなどほとんどできないのです。 (...) だって、人はやり続けるか、続けなければならぬうちに、突然すべてが終わり、結局その人があとに残すのは、その上に文字が刻まれた一塊の石ころだけになるでしょうからね、それにその石ころだって、そこに文字を刻んで建てるのを忘れないか、それだけの眼のある人がいればの話で、石を建ててもらっても、その石の上に雨が降ったり、太陽が照らしたりしているうちに、しばらく経てば、膨られた名前も思い出さなければ、ひっつき傷の意味も忘れてしまい、そんなものは取るに足りないものになります。ですから、もし誰かのところへ行き、それも他人の方が好都合なのですけれど、その人に何かを一枚の紙きれでも何でもいいから何かを手渡すことができれば、たとえそのもの自体は何の意味もなく、それを預かった人が読みもしなければ、しまっておかず、わざわざ捨てたり破ったりさえしなくとも、手渡すという行為があったというだけで、少なくともそれには何かの意味があるのです、と申しますのは、一つの手から別の手へ、一つの心から別の心へと渡されるだけでも、それは一つの出来事として記憶されるでしょうし、それは少なくとも一つのひっつき傷に、何がしかのものに、それがいつかは死ぬことができるという理由から、かつてあったという印をどこかに刻みつけるかもしれない、何がしかのものになるでしょう、それに比べますと、一塊の石ころは死んだり消えたりできませんから、かつてあったことはなれません、ですから今あることもできないのです

もしかしたら一度起りたかった
それで完結するのなんて何なんだ。
Maybe nothing ever happens once and is finished.

—「ハキローブ・ハキローブ」 W·ヘーリー
『Absalom, Absalom!』 William Faulkner, 1936



吉原治良《大阪朝日会館どんぐりのための原画》1951年、75.3×152.2 cm、油彩・布、兵庫県立美術館蔵（参考図版）

2016.1.25 MON ————— 2017.2.19 SUN

○ おおさか創造千島財団

△ 大阪市芸術活動振興事業助成対象案件

主催 クロニクル、クロニクル！実行委員会
協力 大阪府立 江之子島文化芸術創造センター / enoco、ギャラリーやマキファインアート、東京都写真美術館、特定非営利活動法人 キャズ (CAS)、株式会社 七彩、東山 アーティスト・プレイスメント・サービス (HAPS)、朋優学院高等学校、MISAKO & ROSEN
協賛 アイ・オー・データ機器、オーム電機

www.chronicle-chronicle.jp

C Creative Center OSAKA

荒木悠 Yu Araki
伊東孝志 Toshio Ito
大森達郎 Tatsuro Omori
荻原一青 Issei Ogawa

だって、人は生きた印を残すことなどほとんどできないのです。 (...) だって、人はやり続けるか、続けなければならぬうちに、突然すべてが終わり、結局その人があとに残すのは、その上に文字が刻まれた一塊の石ころだけになるでしょうからね、それにその石ころだって、そこに文字を刻んで建てるのを忘れないか、それだけの眼のある人がいる事はない、それだけの眼のある人が

もしかした
それで完結
Maybe nothing

CHRONICLE, CHRONICLE!

January 25, 2016 to February 19, 2017

CHRONICLE, CHR

この展覧会はいくつかのキーワードから出発していることも記しておきたいと思う。だが注意してほしい。これらはあくまできっかけであって、物事が進みだせば取り去ってしまう構わないはしごのようなものだ。

1950年9月3日、ジェーンと名付けられた台風が大阪を襲う。当時大阪に公立の美術学校をつくろうという話が確かにあったようだが、彼女はその計画を見事に洗い流してしまった。水と土が溶け合うそのたなから、再び生きることを始めた人たちがいる。それはもしかすると、「生活」と「美」の乖離を考える上で、必要な手続きを差し出してくれるかもしれない。

2016.1.25 MON ————— 2017.2.19 SUN

1911年に操業を開始した名村造船所。現在は近代化産業遺産にも登録され、アートスペースとして生まれ直している。そこは、つくることと生きることがひとつであるような場所だ。

つくることと生きることを、端的に「しごと」と名指すことができるかもしれない。日々の繰り返しの中で研磨される「しごと」と類するような展覧会をしようと思う。会期は1年間とする。

ルール・1

「クロニクル、クロニクル！」は会期を1年間とする

本展はタイトルからすでに繰り返されている。同じ展覧会を2度繰り返す。展覧会は、始まりと終わりの2回、繰り返される。

一度目は2016年1月25日(月)から2月21日(日)まで。二度目は2017年1月23日(月)から2月19日(日)まで。ただし、「クロニクル、クロニクル！」は1年続く。

ふたつの会期は仮設的なフレーム——暫定的な始まりと終わり——として存在している。展覧会は通過していくものとして、繰り返されるものとして存在している。

ルール・2

1年の会期のうち、展覧会を2度、名村造船所跡で行う

ふたつの会期のあいだも、さまざまな出来事が繰り返される。

作品は移動し続けるかもしれないし、展覧会は違う機能を持つことになるかもしれないし、どこかで誰かが何かを語り始めるかもしれない。変わるものかもしれないし、変わらないかもしれない。変わっていても気づかないかもしれない。でもそれは劇的な変化かもしれない。

とはいえますこう言い切ろうと思う。2度行われるという展覧会において、毎日の繰り返しにおいて、複製され膨張しすべてを把握することなど到底出来ないたくさんの物質とたくさんの人間がいる世界において、僕は、あなたは、絞り出すような声で叫びたいのだ。繰り返される「クロニクル＝年代記」を。

ルール・3

繰り返すこと、繰り返されることについて1年間考え続けること

Chronicle, Chronicle!

イベントについて：

「クロニクル、クロニクル！」では、1年間を通して、また2回の展覧会会期中を通して、たくさんのイベントを開催します。

例えば今回の展覧会は「搬入」も「搬出」も会期内に含まれています。あなたが名村造船所を訪れるときにも、きっと何かが起きています。

www.chronicle-chronicle.jp

情報は随時HPなどで更新します。

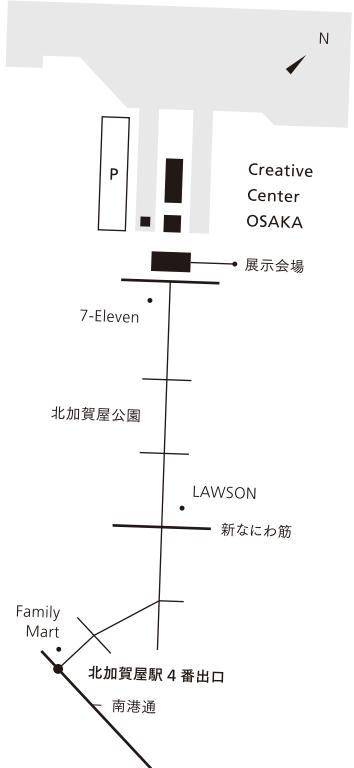


Creative Center OSAKA

クロニクル、クロニクル！

クロニクル、クロニクル！ 実行委員会
土方大（ディレクター）+長谷川新（キュレーター）

幕が上がると同時に役目を終え、折り畳まれて隠れ去る緞帳には、しかし多くの美術家が関わりを持っているようだ。大阪朝日会館のそれは日本初の綴緞緞帳であった。見るものと見られるものを隔てる緞帳 자체を、私たちは果たして見ていただろうか。たとえもうそれが存在しないとしても、私たちはなお、それを見る能够性があるのではないか。



アクセス：

CCO クリエイティブセンター大阪

〒559-0011

大阪市住之江区北加賀屋4丁目1番55号
名村造船旧大阪工場跡

06-4702-7085

cco@namura.cc

<http://www.namura.cc/>

- 大阪市営地下鉄四つ橋線
北加賀屋駅4番出口より徒歩10分

- 駐車場：200台

お問い合わせ：

クロニクル、クロニクル！ 実行委員会
info@chronicle-chronicle.jp

天保山——そこにはかつて美術館があり、今は巨大なスクリーンがある。

立体を平面へと写し取り、再び立体へと送り返す光。IMAX。そこまでして私たちは身体を光へと没入させたいのだろうか。私たちは防衛されているのだろうか。映画を生み出した兄弟は、まず工場の労働者たちを撮った。

IMAX